

各関係機関の長

各病虫害防除員 殿

宮崎県病虫害防除・肥料検査センター所長

平成 2 5 年度病虫害発生予報第 6 号について

平成 2 5 年度病虫害発生予報第 6 号を発表したので送付します。

平成 2 5 年 度 病 害 虫 発 生 予 報 第 6 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

○ 発生予報の概要

作 物 名	病 害 虫 名	発生量の 平年比	記載ページ
大豆及び野菜・花 き類	1 ハスモンヨトウ等のチョウ目(鱗 翅目)害虫※	やや多	2
施設野菜全般	1 土壌病虫害	—	2
トマト	1 トマト黄化葉巻病(TYLCV)	—	3
ウリ類	1 黄化えそ病(MYSV)	—	3
	2 キュウリ・メロン退緑黄化病(CCYV)	—	3
促成いちご	1 炭疽病※、萎黄病	—	4
	2 その他の病虫害	—	4
果樹全般	1 果樹カメムシ類	—	4
カンキツ類 (露地栽培)	1 黒点病※	やや多	5
	2 ミカンハダニ	やや多	5
茶	1 炭疽病※※	並	5
	2 チャノコカクモンハマキ	並	5
	3 チャハマキ	並	6
	4 チャノホソガ	やや少	7
	5 カンザワハダニ	並	7
	6 チャノミドリヒメヨコバイ	並	8
	7 チャノキイロアザミウマ	並	8
	8 クワシロカイガラムシ	並	8

※※は注意報を発表。 ※は防除情報を発表。

○ 作物の生育状況(9月中旬)

極早生うんしゅうみかんは収穫期、その他のカンキツ類は果実肥大期、茶は秋芽生育期であった。

○ 向こう1か月の気象予報

天候は数日の周期で変わり平年と同様に晴れの日が多く、平均気温は平年より高い確率60%、降水量は平年並の確率40%、日照時間は平年並の確率40%と予想されている。

(1 か月予報 鹿児島地方気象台 9月27日発表)

○ 発生予報の根拠および防除対策

大豆及び野菜・花き類

1 ハスモンヨトウ等のチョウ目害虫（やや多）

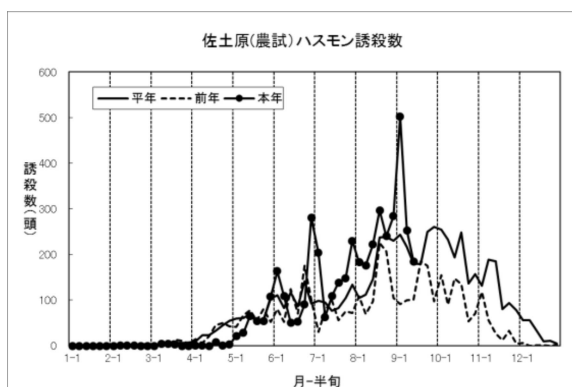
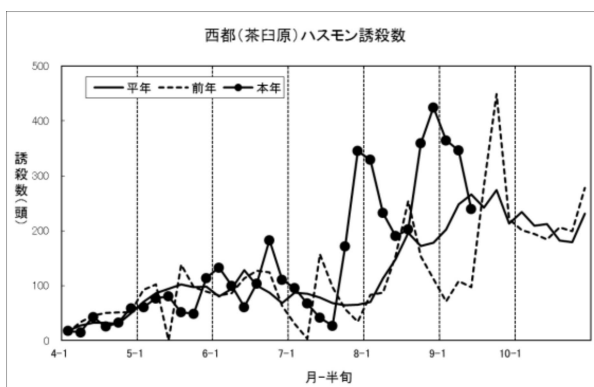
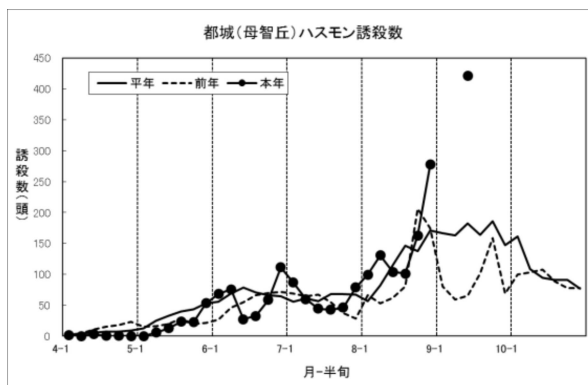
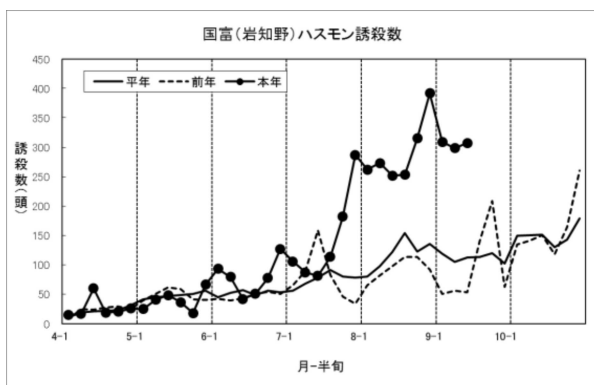
※ 平成25年度病害虫防除情報第10号（9月4日発表）参照

〔予報の根拠〕

- （1）9月中旬のハスモンヨトウ等のサツマイモほ場での発生面積率75.0%（平年88.4%）は平年よりやや少、被害葉率10.4%（平年45.9%）は平年より少である。
- （2）大豆ほ場での発生面積率100.0%（平年87.9%）は平年並、食害度29.6（平年17.2）は平年よりやや多である。
- （3）国富町、都城市、西都市、宮崎市佐土原町に設置したフェロモントラップ調査による誘殺数は、いずれの地点もほぼ平年並～やや多い状況で推移している。

〔防除上の注意〕

- （1）幼虫が大きくなると薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め若齢幼虫期の小さい内に防除する。



施設野菜全般

1 土壌病害虫

〔防除上の注意〕

- （1）台風等による大雨では場が冠水した場合は、土壌消毒の効果がなくなり、疫病や青枯病、線虫等の被害が発生する恐れがあるので、排水対策を十分行うとともに、必要に応じて再度土壌消毒を行う。
- （2）薬剤による土壌消毒を行う場合は、事前の耕起、整地は丁寧に行い、土壌水分の調整を適切に行う。
- （3）苗等の生育状況をこまめに観察し、疫病等の発病が疑われる場合は、早めに防除

を行う。

トマト

1 トマト黄化葉巻病 (TYLCV)

〔防除上の注意〕

- (1) 病原ウイルスは、タバココナジラミ類（バイオタイプ B (シルバーリーフコナジラミ)、バイオタイプ Q) によって伝搬されるので、媒介虫の施設内への飛び込みを防止し、増殖しないよう防除を行う。また発病株は見つけ次第抜根し、ほ場から持ち出し埋没処分する。
- (2) 生育初期に感染すると被害が激しく、全滅する場合もあるので、媒介虫の施設への侵入を防ぐため、育苗・栽培施設の開口部には、目合い0.4mm以下の防虫ネットを設置するとともに、育苗期間中の防除を徹底する。
- (3) タバココナジラミ類は、一旦密度が増加すると防除が難しいので、定植時に粒剤処理を行うとともに発生初期の防除を徹底する。また、黄色粘着トラップを設置し、早期発見・密度抑制に努める。
- (4) 特に、タバココナジラミ バイオタイプ Q は、各種薬剤に対する感受性が低く防除効果が劣る場合があるので、適切な薬剤の選択が必要である。
- (5) タバココナジラミ類は多くの植物に寄生し、増殖するので、育苗・栽培施設内外の除草を徹底するとともに栽培目的以外の作物や観葉植物等を持ち込まない。

ウリ類

1 黄化えそ病 (MYSV)

〔防除上の注意〕

- (1) 一部地域の露地きゅうりで確認され、徐々に拡大傾向にあることから、今後は、現在未発生の地域でも発生が懸念される。
- (2) 近紫外線カットフィルムや施設開口部に防虫ネット（0.4mm目合い以下）を必ず設置するとともに、施設周囲に光反射マルチ（少なくとも70cm幅以上）を被覆する等の物理的防除手段を利用し、施設内へのウイルス媒介虫の侵入を抑制する。
- (3) 本病を媒介するミナミキイロアザミウマは各種薬剤に対する感受性低下が確認されており、薬剤のみに依存すると防除が困難になる。そのため、本虫が土中や地表面で蛹化することを防止するためのマルチ被覆や誘殺のための有色粘着板の設置、生物農薬の使用等、総合的な防除対策を講じる。

2 キュウリ・メロン退緑黄化病 (CCYV)

〔防除上の注意〕

- (1) 病原ウイルスは、タバココナジラミ類（バイオタイプ B (シルバーリーフコナジラミ)、バイオタイプ Q) によって伝搬されるので、媒介虫の施設内への飛び込みを防止し、増殖しないよう防除を行う。
- (2) きゅうりでは、特に摘心栽培で影響が出やすく、発生の程度によっては収量の減少につながる。メロンでは、感染した場合、着果とともに症状が激しくなり品質・収量が低下する。
- (3) きゅうり、メロンともに育苗期からの感染防止に努め、特にメロンでは開花結実期までの防除を徹底する。
- (4) 草勢の低下により症状が進行するため、葉面散布等の実施により草勢の維持管理に努める。
- (5) 防除対策については、トマト黄化葉巻病の項を参照する。

促成いちご

1 炭疽病、萎黄病

※ 炭疽病については平成25年度病害虫防除情報第5号（7月5日発表）参照

〔防除上の注意〕

- （1）罹病苗の持ち込みは本ぼ内での感染源となるため、健全苗の定植に努める。苗床で発病した苗については、その周囲の苗も感染苗と見なし、適切に処分する。（発病苗及び半径3ポット程度は廃棄する。圃場周囲に放置しない。）
- （2）定植後に発病した株は早期に除去し、ビニール袋に入れて隔離するなど病原菌の拡大防止に努める。

2 その他の病害虫

〔防除上の注意〕

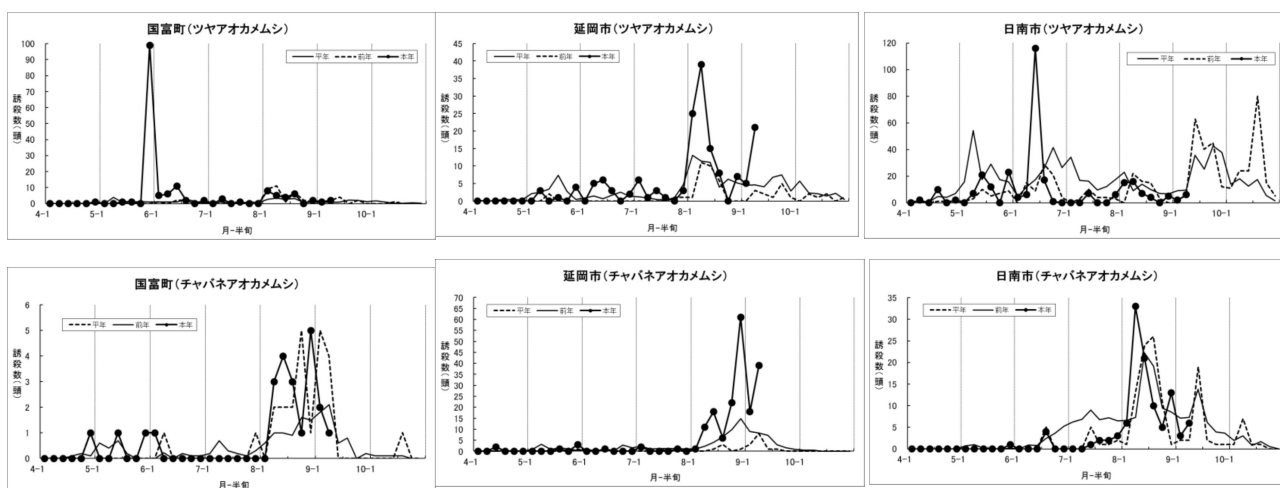
- （1）近年、苗からの持ち込みによるうどんこ病やハダニ類の発生が多く、定植初期から病害虫の発生が多い状況が見られるので、定植前に防除を徹底し、本ぼに病害虫を持ち込まないよう注意する。

果樹全般

1 果樹カメムシ類

〔防除上の注意〕

- （1）フェロモントラップ調査での誘殺数は少ないが、国富町・延岡市のチャバネアオカメムシの予察灯における誘殺数が9月上旬以降増加傾向にあるので注意が必要である。
- （2）果樹カメムシ類は園外から飛来し、地域や時期によって発生量が大きく変動するので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努める。
- （3）うんしゅうみかんでは、色ぬけから着色始め頃の加害は落果を生じやすく、特に注意が必要である。



カンキツ類(露地栽培)

1 黒点病 (やや多)

※平成25年度病害虫防除情報第7号(8月22日発表)参照

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の発生面積率77.8%(平成59.9%)は平成よりやや多、発病果率59.7%(平成17.2%)は平成より多である。

[防除上の注意]

- (1) 感染源となる枯れ枝は、可能な限り取り除き園外に持ち出して処分する。
(2) 防除間隔の目安は積算降水量250mmで、降水量が少なくても1か月後には次の防除が必要である。

2 ミカンハダニ (やや多)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の発生面積率55.7%(平成39.1%)は平成よりやや多、寄生葉率22.2%(平成6.4%)は平成より多である。

- (2) 向こう1か月の天候は、平成と同様に晴れの日が多く、平均気温は高い確率60%と予想されており、本虫の増殖に好適な環境が予想される。

[防除上の注意]

- (1) 生息密度が高くなると防除効果が劣るので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5~1頭を目安に、発生初期に防除を行う。
(2) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を実施する。

茶

1 炭疽病 (並)

※平成25年度病害虫発生予察注意報第1号(4月15日発表)参照

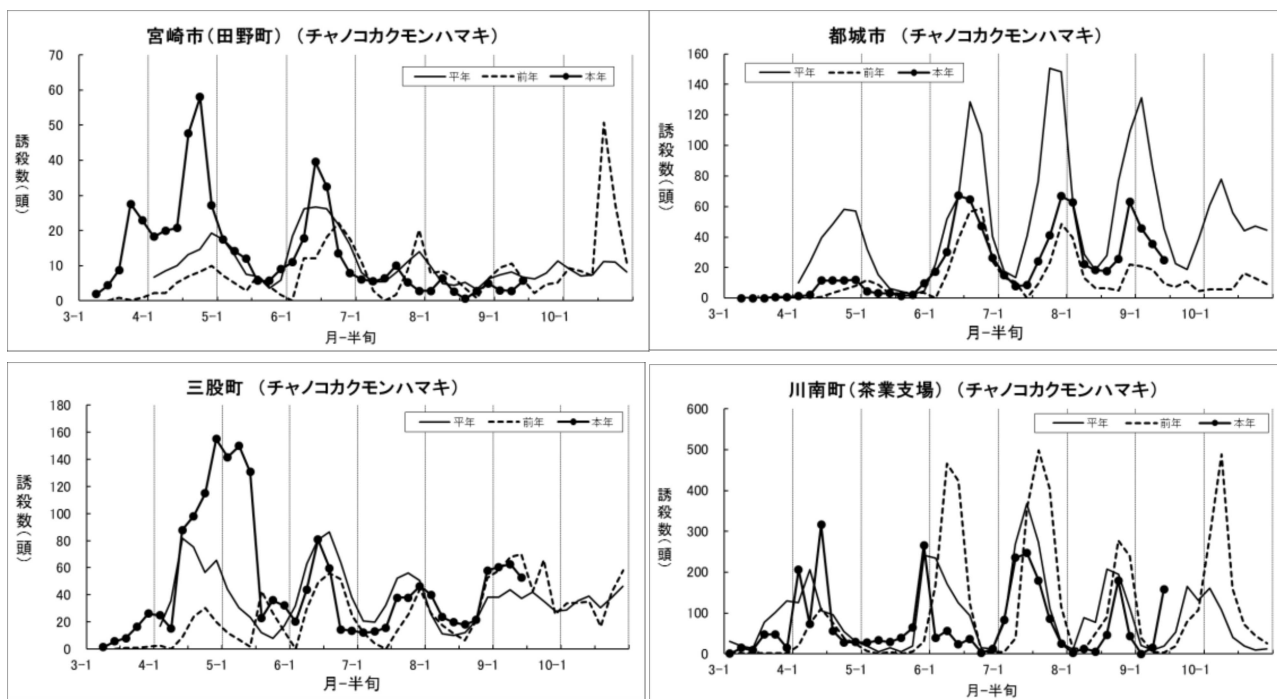
[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の発生面積率53.0%(平成54.8%)は平成並、 m^2 当たり病葉数12.6葉(平成6.3葉)は平成よりやや多である。

2 チャノコカクモンハマキ (並)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の巡回調査では発生を確認していない。
(平成値:発生面積率1.2%、 m^2 当たり虫数0.0頭)
(2) 宮崎市田野町、都城市、三股町、川南町(茶場支場)に設置しているフェロモントラップ調査では、前回の発蛾最盛期は8月末から9月上旬であり、誘殺数は平成並~やや少ない状況である。



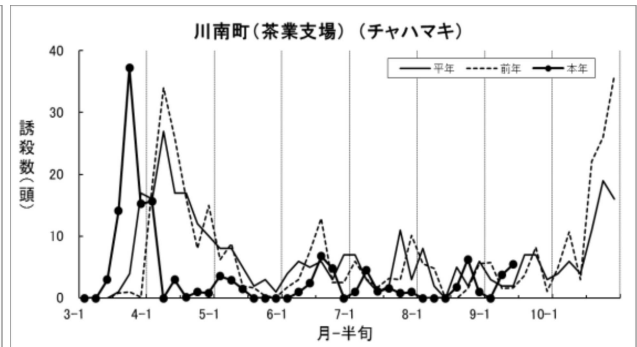
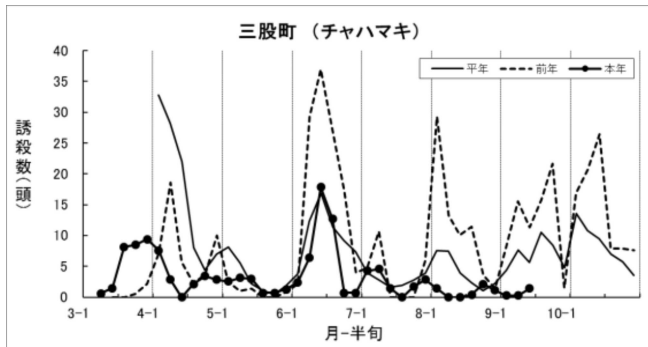
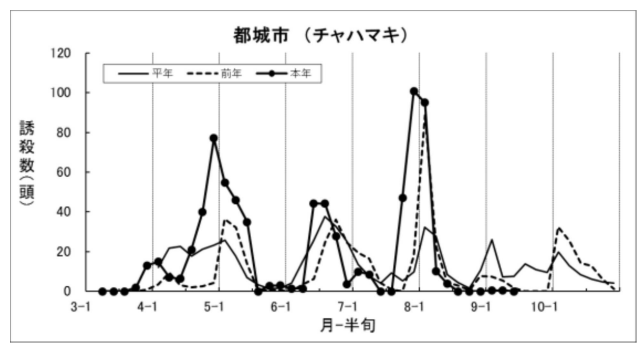
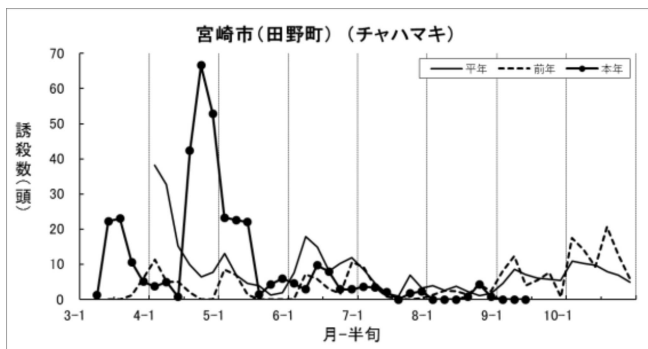
3 チャハマキ (並)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の発生面積率5.9% (平年0.6%)、 m^2 当たり虫数0.1頭 (平年0頭) はいずれも平年より多である。
- (2) フェロモントラップ調査での前回の発蛾最盛期は8月下旬であり、誘殺数は平年よりやや少ない状況である。

[防除上の注意]

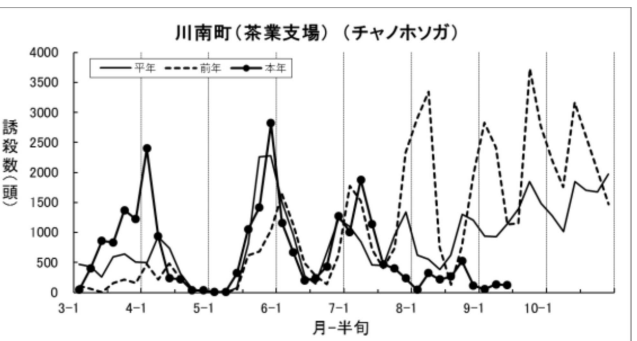
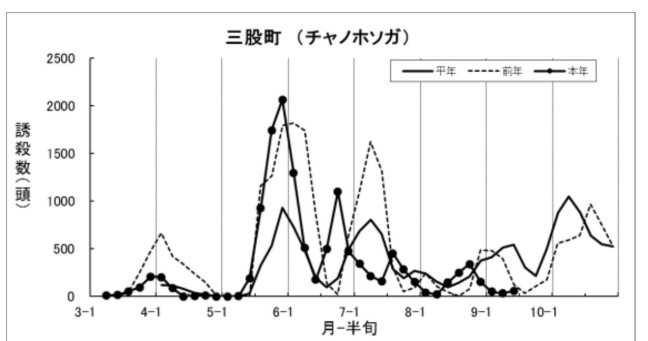
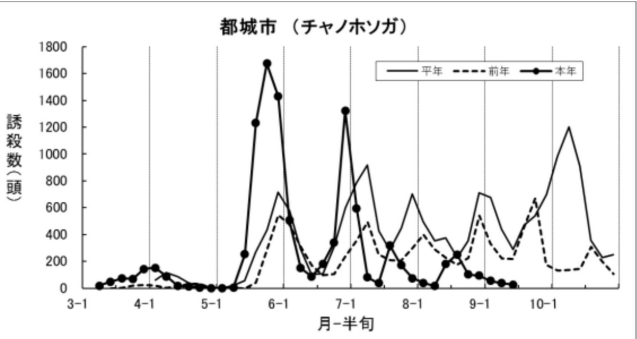
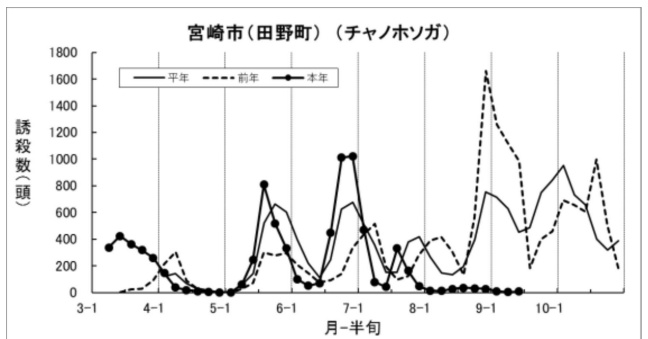
- (1) 発生状況は地域により差があるので、ほ場での発生状況の確認をする。
- (2) 防除適期は、発蛾最盛日から7～10日の若齢幼虫期である。
- (3) 地域によっては、秋期に被害発生が見られることがあるので注意する。



4 チャノホソガ (やや少)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の発生面積率23.5% (平年43.2%)、 m^2 当たり巻葉数0.7葉 (平年5.4葉) はいずれも平年よりやや少である。
- (2) フェロモントラップ調査での前回の発蛾最盛期は8月中～下旬であり、誘殺数は少ない状況である。



5 カンザワハダニ (並)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の発生面積率29.4% (平年37.3%)、寄生葉率2.1% (平年3.2%) はいずれも平年並、100葉当たり虫数2.4頭 (平年5.5頭) は平年よりやや少である。

- (2) 向こう1か月の天候は、平年と同様に晴れの日が多く、平均気温は高い確率60%、と予想されており、本虫の増殖に好適な環境が予想される。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は越冬前の10月中下旬であるが、気象要因による変化が大きいため、茶園を観察して防除の必要性および時期を判断する。
- (2) 温度が高い時期のマシン油乳剤の使用は、赤焼病の発生を助長させるので、気温の安定した11月中旬～12月下旬に行う。
- (3) 本県では、冬期においてもダニの繁殖が見られるため越冬前の防除がより重要であり、この時期の防除が十分でないと翌年の一番茶への影響が大きい。
- (4) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を実施する。

6 チャノミドリヒメヨコバイ (並)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の見取り調査による発生面積率35.3% (平年48.7%) は平年よりやや少、寄生葉率2.5% (平年3.4%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 秋整枝を行う成木園では特別に防除をする必要性は低い、更新園や幼木園では新芽の生育期間が長く、被害を受けやすいので、芽の状況に合わせて防除する。

7 チャノキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の見取り調査による発生面積率52.9% (平年39.8%)、寄生葉率6.4% (平年4.1%) はいずれも平年よりやや多である。
- (2) 9月中旬の払い落とし調査による発生面積率52.9% (平年49.4%)、払落虫数4.1頭 (平年6.5頭) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 秋整枝を行う成木園では特別に防除をする必要性は低い、更新園や幼木園では新芽の生育期間が長く、被害を受けやすいので、芽の状況に合わせて防除する。

8 クワシロカイガラムシ (並)

[予報の根拠]

- (1) 9月中旬の発生面積率11.8% (平年21.8%) は平年よりやや少、寄生株率2.4% (平年6.0%) は平年並である。

[防除上の注意]

- (1) 防除適期は幼虫ふ化最盛期なので、園内のふ化状況をよく観察して防除する。
- (2) 県南部では、第4世代の発生する地域があるが、気温の高い傾向が続いているため、平年発生のない地域でも第4世代の発生が懸念されるので今後の発生状況に注意する。
- (3) 薬剤散布量は、成木園で10a当たり1,000リットル程度を目安に、専用噴口を使うなどして枝幹に十分かかるようにていねいに散布する。

○ その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

宮崎県農薬安全使用啓発ホームページ

<http://nouyaku-tekisei.pref.miyazaki.lg.jp/nouyaku/user/top/miyazaki>

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/>

農林水産消費安全技術センターホームページ

<http://www.acis.famic.go.jp/>

- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。
- 3 発生量(程度)の区分

多 い	(高 い)	やや多いの外側 10%の度数の入る幅
やや多い	(やや高い)	平年並の外側 20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として 40%の度数の入る幅
やや少ない	(やや低い)	平年並の外側 20%の度数の入る幅
少ない	(低 い)	やや少ないの外側 10%の度数の入る幅 (平年値は過去 10 年間の平均)

4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の 5 つです。

- (1) 予 報・・・向こう 1 か月の発生状況を予測し、毎月 25 日前後に発表する。
- (2) 注 意 報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
- (3) 警 報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
- (4) 特 殊 報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。
- (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

○ お知らせ

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。
ホームページアドレスは、<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>です。

【文書取扱】

病虫害防除・肥料検査センター 倉富
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-2127
E-mail: byogaichu-hiryo
@pref.miyazaki.lg.jp